

トランスナショナル化するライフコース — アジアの外国人家事労働者の調査から —

徳島大学 上野加代子

1 目的

トランスナショナル・ライフコース・パースペクティブ (TLP) は、労働、結婚、就学などさまざまな理由で国境を超える人の移動を、母国でのそれまでの生活から連続する一連のプロセスとみなし、ライフステージの変化を一貫して把握しようとする点で、従来の研究よりも包括的である。とはいえ、この TLP も、ライフステージの変化に伴う役割の変遷については十分な考察をしてきたとは言い難い。また、女性の役割の多様性の把握も十分ではない。

そこで本研究では、TLP に依拠しつつも、女性の持つ多様な役割に目配りし、しかもそうした役割がライフステージの変化に伴って変遷するさまについても考察を加えたい。ライフステージの変化は、多くの場合、外国への移動（就労）というイベントと密接にかかわっており、また母国、就労国双方の社会制度からの影響も受ける。本研究ではそうした社会的なものの影響についても視野に入れる。

2 方法

本研究のもとになるデータは、シンガポールなどで実施した家事労働者（元家事労働者を含む）へのインタビュー調査である。彼女たちは、インドネシアかフィリピン、ミャンマーの出身で、シンガポール、台湾、香港、タイで就労を経験している。インタビュー・データは、移動に伴うライフステージの変化を捉えるという観点から、(1)国境を超えるまでのステージ、(2)受け入れ国で家事労働者として就労するステージ、(3)その後のステージ、の三つに区分して整理する。

3 結果・結論

出国前のステージでは、女性が海外就労を決意する契機となる各国の社会的要因を見ていくが、なかでも、海外就労をあっせんするネットワークの規模や形態が重要である。

移動先における就労ステージでは、彼女たちの多様な役割を浮き上がってきた。つまり、彼女たちは、従来の研究でもっぱらそう捉えられてきたような単なる労働者や母国の子供の母親だけでなく、雇用者家族との関係では擬似的な家族員としての役割を果たす。定期的に休日をとることができる女性においては、学生としてスキルアップのクラスに参加し、教会などに属し、NGO などコミュニティ団体のボランティアとして活動する場合もある。また、彼女たちは、自国の家族や自分のために、経済的により発展した就労国で新しい商品を購入する消費者でもある。

その後のステージは、個人や出身国によって多様なものとなる。本研究では、そうした多様なライフコースを、いくつかの顕著に観察可能なパターンの接合として整理した。①母国に定住せず、家事労働者として国際移動を継続する。②海外就労中の貯蓄を活かして、帰国後、母国で投資や経営を行う。③帰国後、元外国人家事労働者であることを活かしてキャリア形成する。④母国あるいは就労国の男性と結婚したり、母国に帰って出産する。

アジアの外国人家事労働者は、グローバル経済システムに取り込まれた「弱者」であることは間違いない。しかし、彼女たちを単なる弱者としてではなく、アクターとして捉えると、実にさまざまなストラテジーを駆使して人生を切り開こうとする能動的な姿が浮かび上がってくる。